

要約

本研究は、低出生体重児の発達と養育者の捉えた気質的特徴、養育者の育児ストレスを実証的に検討し、養育者の育児ストレスを軽減し、乳幼児虐待を予防するための基礎的な資料を得ることを目的とする。調査は首都圏 A 総合病院の小児科のフォローアップ外来にて、NICU を退院した低出生体重児 42 名とその養育者を対象に行われた。結果は、低出生体重児の出生体重のみならず AP 値と発達との関連が認められた。また、低出生体重児の発達と養育者の育児ストレスとの関連が認められ、特に言語—社会領域の発達が遅れている児の養育者の育児ストレスが高く、「親を喜ばせる反応の少ない」と感じやすい傾向にあった。また、修正 6・7 カ月群において、低出生体重児の全般的な気質の難しさを感じている養育者の育児ストレスが高い傾向にあった。特に、低出生体重児の気質的特徴の中でも、児の「予測不可能性」が高いと感じている養育者は「親としての有能性」を感じにくいことや児の「気難しさ」の傾向が高いと感じている養育者ほど「子どもに愛着を感じにくい」と感じやすいことが明らかにされた。

NICU を退院して自宅で育児をする早期の乳児期において、低出生体重児の気質的特徴を難しいと認知した場合の養育者の具体的な育児ストレスの内容が明らかにされた。健診などで低出生体重児とその養育者に接する医療者などは、これらの傾向があることを知り、配慮することが重要であると示唆される。また、養育者の子どもの気質的特徴への認知は、第三者と共有する中でポジティブな方向に変化し、それに伴い、親子の相互作用も発達可能性があることから、養育者が積極的に育児支援を受けやすい環境についても検討することが求められる。

今後の課題としては、親子の相互作用の実証的な研究、縦断的な研究等が挙げられる。